

昭和  
和和  
四十四  
十六年  
七月  
月二十三  
十五日  
日  
発行三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日発行)

(通第二六三号)

# 慈光

第二十三卷 第四号

## 次

慈愛と真実(三).....	近角常観.....(1)
大経の会座.....	福島政雄.....(8)
西方浄土.....	高原憲.....(11)
一道会の記(二).....	榊原徳草.....(16)
真田増丸師の法味.....	花田正夫.....(21)



# 慈愛と真実

(三)

## 近角常観

### 七、罪惡の自覺

法然上人が宣説されたる選択本願の親心は、人生は南無阿弥陀仏の如来の大慈大悲ばかりで救われるということである。故に専修（せんしゆう）念仏と名づけたのである。これはなほだわかり難いことである。

勿論、親心の深きことは、如何なる罪惡のものでも救われるか、我はさほどの悪人ではない。また、如何に悪しきものか救われるといえばとて、善をなすに過ぎたることはない。しかるに念仏ばかりなりといいて他の戒律、智慧、其他の行をえらびずてるといふは、いささか偏狹（へんきよう）ではないかと疑いを起しやすいためである。

法然上人の専修念仏の教か、その当時一世に誤解されたのも、迫害されたのもこの一点である。高野山の明遍僧都（みょうへんそうず）か、法然上人の選択本願念仏集を読まれたとき、専ら念仏のみを主張するは偏執（へんしきゆう）であると考えられたということである。しかるにその夜、たまたま夢をみられた。その夢は、当時盛んであった

大阪天王寺の西の門外に多くの病人やら貧しい乞食かい、そこへ一人の聖僧があらわれて、粥や重湯（おもゆ）をサジをもって食べさせておられる。明遍僧都は、夢の中から、側の人に、かの聖僧は何人であるか、と尋ねたのに、法然上人であるという答であった。

そこで僧都が思われるには、さては、専修念仏というは粥であるか、重湯であるか、要するに仏のお慈悲の粥である。いかなる心の病人でも食べられるように、仏法の真味を重湯にしたのである。それをつまらぬ愚夫愚婦の教であると思うたのは、大なる誤りであった。我は立派に戒律をたもてるものである、いかなる修行も出来るものであると思ふゆえ、念仏の粥の味がわからなかった。真面目に自分を省みると、戒律の堅い飯を食うことが出来ぬ、観法（かんぼう）の果実を味わうことが出来ぬ、心の弱き病人である、心の貧しき乞食である。この弱き者、貧しきものを憐れんでおあたえ下さる親の大慈大悲の念仏の粥であることとられた。すでに粥や重湯を食べる身であったならば、堅

き食物や、果実をまじえて食べては矛盾である。仏の念仏の慈悲ばかりでたすけられる我身は、いずれの行も出来ない、罪惡愚痴の凡夫であると自覺されたという有名な説話がある。

この物語は、いかにも絶対の仏の大慈悲ばかりであるという、唯一念仏の反面は、さきに「出来るならば善を為してもよりではいかか」と考へしは、自己を知らなんだのである。いかにしても何れの善も出来ない我身であった、我身こそ地獄一定の罪惡のかたまりであるという自覺を徹底せしめられるのである。これあたかも法然上人の選択本願の親心をきいて、愚禿親鸞たることを自覺された聖人の心持である。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。そのゆえは、自余の行を励みて仏になるべかりける身か、念仏をもうして地獄にも墮ちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみ

かぞかし」

実に、絶対無限の如来大覺の法性法身（ほつししようほつしん）の岸上より、岸下苦海に沈論（ちんりん）せる我等をあわれみたまいて、下だしたまいし唯一救済の力強き繩が、すなわち方便法身（ほうべんほつしん）の阿弥陀仏の選択本願の念仏である。もしや我等が自力をもって、その岸によじのぼることが出来るならば如来の大慈大悲の繩はいらぬのである。

今三谷氏が、名をあげ功を建てられ、いかにも孝のいたりなれども、おそらくは母堂の慈悲に対しては何等尽したるものはないと思わるであらう。もしあらゆる成功を犠牲にして母堂の命があがなえるものならば、これも辞せられぬであらう。しかしいずれの道も無駄である。一たび別れたものは再び会うことは出来ぬ。これいづれの行も及びがたき有様を無常観で云いあらわしたのである。

しかるに、涅槃、常樂の彼岸の上にはまします御親は、この生死海中に迷える我等を導きて、南無阿弥陀仏の繩を下して引きあげて下さるのである。御母堂みずから仏法を信仰して、大慈大悲の道しるべをのこして下さるのである。親かとかく我の居る処へ来れと手を延べて、西岸上より呼んで下さるのである。今となりて、人性唯一の救済の声はこればかりである。この声をきき、この繩をいただければ



我等は、ただその大慈大悲に感泣せずには居られぬ。たといその繩が切れようが落ちようが、その様なことは問題ではない。もとより岸下に墮つる地獄必定の我等であるもの唯一の大慈大悲の大真実をいただく外はない。

法然上人は「源空が往かんとところに往かんと思わるべし」と仰せられたれば、親鸞聖人は「たとい地獄なりとも故人のわたらせたまうところにまいるべしと思ふなり」と告白せられている。しかしこの確信は、いかにも極端なる妄信のように考えられるけれども、それは確信する方の決心から来るのではない。むしろ導きしてくれる親の慈悲の繩の方に絶対力があるのである。

もし平地に安居しておるときに繩を下げられても恐らくは掴まぬであろう、畳の上に安坐せるものには、たすけ船の味はわかるまい。今や無常の生死海中に沈淪し、地獄必定の深淵に墮在（ださい）しておる我等である。しかるにここに大慈大悲の本願の船より、如来救済の呼声をきくのである。法然上人が現にその本願の船に乗りておられるのである。念仏の繩を掴（つか）んで見せて下さるのである。また慈悲の薬を飲んで毒味をして導いて下さるのである。若し船がくつかえるならば生死を共にするのである、繩がされるならば共に海中に没するのである。万一この薬が毒ならば共に運命を同じくするのである。とにかく浄土

ぬと考え努力した。

しかるに自分はこれがために身心を過勞して、その極、全然不得意の境遇におちいるようになったとき、自分ながら意外千万なる心持になった。それは外でもない、たしかに自分は眞実正義であると思うておるゆえ、自分と考の違う人を見て不実不正と思うようになる。不実不正と思うときは、やはりこれを愛することが出来ぬ。それにもかかわらず、私がこれに対して無抵抗の態度をとるとき、我がこそ無抵抗にしておるぞという、一種の抵抗心をまぬがれることは出来ぬ。しかのみならず、自分が不得意の時は、何となく人が同情すくなきひやかなるように見え、不満足な心を起し、自分をみとめてくれぬのが残念になり、領解してくれぬのをうらんたり、甚しきにいたりては、人をのろい、死して嘆する能わざるような心持を生ずるようになった。

そこではじめて自己にたちかえって考えて

みれば、すでに自分が他人に認められないことをかこつというのは、名譽を欲するものである。犠牲になるといふのは、闇から闇に葬られても不足のないことであらねばならぬ。しかるに自分のやったことが無駄になったとかこつのはやはり犠牲になり得ぬのである。して見れば長い間、名利のために働き、自己を認められんために働きた

であろうが地獄であろうが、源空の往かんところへ往かんと思わるべしというが、法然上人が実験して導いて下さる真実である。法然上人が自分の身をもって如来の本願を体現して下さるのである。

さればこそ「たとい法然上人にすかさされたてまつりて、念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」という絶対の大信樂（だいしんぎょう）を開発する所以である。

## 八、相對の善惡

かく如来の絶対の慈悲によりて救済せられたるとき、罪惡の自覚を生ずるのである。しかし常識より見れば、人間必ずしも惡とのみは考えられぬ。實際としては、我は善なりと考うるがむしろ人生の常である。故に我等日常の人生生活において、常識にて用いるところの善惡なるものは、相對的善惡である。それ故に絶対の見地から見れば、善惡ともに罪惡といわなければならぬ。ここにいたりて今すこしく自分の人生問題の実験につきて披瀝（ひれき）せねばならぬ。

私も多くの人が考うる通り、我は宗教のために献身的に働き、人のために犠牲となり、如何なる敵をも愛し、如何に反抗するものに対しても、誠心誠意をもって徹底して、遂に彼心をがひるかえして我と手を握るようにせねばなら

がら、我こそ眞実であると思うて居たのは、全く間違っていた。我こそ正しいという思想がかえって他人とへだて心を生じ、結局斗争におちいりて平和を破壊するようになる。ここにいたりて我は善なりという心が、最後に自己を裏切るようになって、平和を破る最も悪い心になったのである。

聖徳太子の十七憲法、第十条に、左の如き教訓がある。

「怨（このころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違（たか）えるを怒らざれ。人皆心あり心各々執るところあり。彼是（ぜ）なるときは、我非なり、我是なるときは彼非なり。我心すしも聖に非ず。必ずしも愚に非ず、共にこれ凡夫のみ。是非の理（ことわり）誰か能く定むべけん。相共に賢愚なること環（たまき）の端（はし）なきが如し。ここをもって彼人いかと雖も、かえって我があやまちを恐れよ。我ひとり得たりと雖も、衆に従って同じくおこなえ。」

これをもつて見れば、人生生活において、我等か日常用いるところの是非善惡なる思想は、自己を中心として、自己を善とし、相對的に他を惡なりというのである。今時やかましく伝えられるアインシュタインが物理学的に相對性原理（そうたいせいげんり）を主張する如く、精神的にもお互に、自（みずから）を是とし、他を非とする相對性原理



が行われつつあるのである。

今日百般の社会問題が斗争をもって解決せんとする態度は、益々平和を攪乱（かくらん）し、人類の幸福を破壊するものである。この点において私等は思想問題として、この根本的基調の思想に対して、徹底的の解決を要するのである。

ここにいたって結論として我是（ぜ）なりということか最も甚しい罪惡の根源であることが明かになった。それ故前には、我善なりと誇りし心が転覆して、我かくの如き悪しき心では人も我にくみすることを恥じるであろう。何人も賤しむべきものとして我をしりぞけるであろうというように、大層他にへだて心がつのつてくるようになったのである。かくして私は、わが罪惡のために責められて、煩悶その極に達したのである。

これが即、常識でいう相対的の善は真の善にあらずというゆえんである。真の善ありとせば、飽くまで真実を以て人に向い、遂に他の不実を同化してしまふものであらねばならぬ、しかしてこれは我々の実験において不可能である実は法然上人が戒律智慧が出来ぬと云われたのも、親鸞聖人がいずれの行もおよびがたき身なればと仰せられたのも自力作善（させん）が出来ぬというのも、つまりこのへだて心が止まぬことである。ここにおいてとても他人と打ち

とけられない、反抗斗争のかたまりたる我慢なる我をいかにせんかというのが、最後にのこされた問題である。

### 九、信樂開発

かく我等は一面には平和を欲し、一面には斗争がやまぬという如何ともすべからざる精神状態の時、我等が切望してやまざるものは、何人か私が打ちとけ得ざる心持を領解してくる人はないか。詳言せば、汝はへだて心がやめられ得るのにやめぬのではない、如何に汝かやめようとしても、へだて心がやめ得ぬであると、私の心底を察して領解してくれる人はあるまいか。若しかく領解してくれる人であるならば、たとい私が如何にへだて心をもって其人に向うとも、その人は何処までも、あきれず、私が限りなく心をへだて、飽くまで我をもつて向うといえども、更にこれを意に介せざるのみならず、絶対にわが不実なる悪しき心を受け容れて、これをとりかしてくれ、あだかも如何なる沢山なる氷も、太陽の前には何等のさわりをなす能わざるが如くであるだろう。

かくの如き場合にはいかに執拗（しつよう）なる我慢闘争の私も、恐れ入りて心の底よりとろかさねばならぬ。しかして私は終に煩悶の極、日夜彷徨（ほうこう）せしため、筋炎という病氣にかかり、腫物を切開して身体の病よくやく癒えんとする時、不思議なるかな廓然（かくねん）

として心はたちまちその境に達したのである。その時はじめて、その私のへだて心のやまぬのを領解して下さったが仏の五劫思惟の選択本願の親心であったことに気づかされた。すでに領解して下さるため、飽くまで私のへだて心を受け容れて、無限にへだてたまわぬのが永劫の修行である。これが大慈大悲の親の真実心である。親鸞聖人はこれをあきらかにして左の如くのべられた。

（教行信証の信巻に）

「一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢惡汗染（えあくわせん）にして清浄の心なく、虚仮詭偽（こけてんぎ）にして真実の心なし。ここをもって如来、一切苦惱の衆生海を悲憫（ひみん）したまいて、不可思議光載永劫において菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したもうところ、一念一刹那も清浄ならざることなし。

如来、清浄の真心をもって、円融無碍（えんゆうむげ）不可思議、不可称、不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまえり。

則ちこれ利他の真心をあらわす、故に疑蓋（ぎがい）まじうることなし。この至心は則ち至徳（しとく）の尊号をその体と為すなり。

これが如来の真実心である。即ち我等欲心の止まぬものに欲心を離れてあたえたまい、我等瞋恚（しんに）の止まぬことを見そなわす故に、飽くまでいかりたまわず、和顔愛語をもって我等に先きだちて慰めたまい、また麁言（そげん）を用いて、自ら害し他をも害せんとする我等に対して、善語を用いたまい、自ら利したもうのみならず、我等もそれがために利せらるる如き、みな如来が我等がために永劫の間苦行したもう事実である。かくてあらわれたもう如来を尽十方無碍光如来と名づけ奉るのである。

○尽十方の無碍光は、無明のやみをてらしつ

一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ

○無碍光の利益より、威徳広大の信をえて

かならず煩惱の氷とけ すなわち菩提の水となる

○罪障功徳の体となる、氷と水のごとくにて

氷多きに水多し、さわり多きに徳多し

○名号不思議の海水は、逆謗の屍骸もとどまらず

衆惡の万川帰しぬれば 功徳のうしおに一味なり

○尽十方無碍光の、大悲大願の海水に、

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしおに一味なり

これ即ち、如来の真実心が徹底して、我等が無明闇黒の胸中、あたかも暁天日出するが如く、信樂開発（かいほつ）するありさまである。かくて絶対の大善大行たる真実は、



我等無辺極濁悪を拯濟（じようさい）したもうのである。ここにおいて如来の慈悲は太陽の光の如く、我等相對の善悪はいずれも夜中の明闇の如くである。即ち相對の善と悪とは、絶対の大慈大悲に対しては夜中の灯火と闇室との如くである。太陽ひとたび出するに及びて、灯火も明を失して日光の前には何の要もなきぬのである。また如何なる闇室も、夜が明けてみれば、ことごとく闇が破れるのである。

「本願を信ぜんには他の善も要にあらざり、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまざまのほどの悪なきゆえに。」（歎異抄一条）

この文句は如何にも大慈大悲の親心の前には、善悪の二ついずれもひとしく救済される有様を示されたものである。たとい孝心きわまる貴き人も、親の恩を感じ来るときは、すこしも孝を為すとは思わず、かえって山海の恩にむくゆることの足らざるをのみ憂うる如くである。また如何なる不孝の子と雖、親は飽くまでその子を愛すること極りなきが為に、ついには感激おくあたわさること、前記の姥捨山の子の如くである。かくて如何なる子供も親の大慈大悲の絶対の眞実の前には、一味平等に救済されざるものはなく親の之恩の前には、いずれも自己の罪惡を自覺して懺悔、報謝の念をおこさざるものなき有様である。

## 大 經 の 会 座

大經の会座（えざ）ということを考えて、私はこれを法華經の会座と對照する。法華經の会座では、お弟子や菩薩のみならず、ヤシユダラ姫もラゴラもアジャセもあり、日月星辰四大海水も天子や竜王という姿で集まっている。天地理宙人間鳥獸虫魚悉く法華の会座にあるという有様である。非常に広大な感じである。

然るに大經の会座は趣がちがう。お弟子や菩薩だけである。そのあとには菩薩の徳の讃嘆の段がある。それで法華經の会座の中における私ということになれば一寸想像がつきかねる。あまりに舞台が広大であるので、自分がどこにいるかわからぬという感じになる。滄海（そうかい）の一粟（いちぞく）というような風で私がある中においては相違ないが、舞台が大きいので私はその存在などは問題にならない。それが大經の会座となれば私はその末席にいると感ずる。勿論遙かな末席ではあるが、私ははっきりとその末席にいる。そして釈尊のお眼は此の私にもそそがれている。

かくの如く、信樂開発の晝に達して見れば、人生相對界における善悪は、あたかも昨夜の夢の如きものである。善といえどもこの絶対の大善の前には慙愧の外はないのである。また如何なる悪も絶対の慈悲をあきれさすことは出来ぬのである。かえって如何なる罪惡の者も親心の偉大極りなきには、不思議と驚歎してあきれるより外はない。

ここにおいて、さきに聖徳太子が十七憲法において、是非善惡の鬭争はいずれも凡夫のみと道破されたる人生的相對は、遂に絶対唯一の眞実によりて救済されるのである。この境を親鸞聖人は歎異抄に、左の如く云われてある。「聖人の仰せには、善惡の二つ縋（く）じても存知せざるなり。その故は如来の御心によしと思召すほどに知り通したらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の惡しと思召すほどに知り通したらばこそ惡しきを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡天、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ仰せは候いしか。」

かくの如く人生の是非善惡の思想が大慈大悲の親心のために融和せられて見れば、社会鬭争の根本基調が一変して、精神的平和の世界が建現さることが出来るのである。

続く

## 福 島 政 雄

昔の建築には八方にらみの絵というものが書いてあるのである。その部屋のどこに座してもその絵の人物又は動物が自分の方を見ているのである。仏様の場合には八方にらみではない。慈眼視衆生（じげんしじゆじよをみそなわす）であって、如何なる末席に座している者をも慈悲の眼を以て見て下さるのである。たしか鳳凰堂（ほうおうどう）の壁画の仏様がそうであったと記憶する。どこに座って拜んで見ても仏様は自分を見て下さる。否自分一人を見て下さるような感じがする。実に有りがたい。

いま大經の釈尊が正にその通りである。私は仏滅後二千五百年も経ってからこの世に生れて、生れて二十六年も経ってから大經の会座に列していることに目がさめたのであるから、実に何とも言えないような遙かな末席にいるので、普通の考から云えば釈尊のお目が届くかしらと思われほどである。然るに実は釈尊が此の私一人を目かけて大經の説法をなされていて、釈尊の御眼は此の私一人のためにそそがれているという感じがある。これは不思議なこと



であつて常識の世界ではない。

舞台は広大ではない。併し王舎城靈鷲山の会座は遠く今日まで続いている。十六の菩薩達は普賢菩薩（ふげんぼさつ）を初として仏様の心の光を私に届けて下さる生きたお姿である。菩薩は歴史上の人物ではない。心の光をあらわして現在この私にひびいて下さるのちである。大経の御説法も歴史ではなく神話でもない、釈尊の深い御いのちの問題である。私は大経の会座に列することを嬉しくおもふ。そして釈尊が私ただ一人を見ていて下さることを感じ、更に嬉しいのである。

更に嬉しいことは私と共に列んで下さる現在の法の友のお姿である。その法の友達はひとりひとり釈尊は自分一人を見て下さると感じていられるであろう。しかもそれだからこそお互の心がひびき合うのである。子供らは同じ父母を自分一人のための父母とめいめに感じている。此の感じの中に子供らは融け合つて行く。父を呼び母を呼ぶ。その呼び声がひびき合つて子供らのお互の心が融ける。お念仏、それは父を呼ぶ声でもあるが、それよりもなお母を呼ぶ声である。

父母と言う、釈尊は父であり弥陀尊は母である。父は母の苦勞と心とを子供らに説く。釈尊は父として母親弥陀尊の御苦勞とお心とを説きたもう。その会座に私は列して

上でその御説法を聴いている。実に不可思議の聞法である。

聞法と云うよりも聞光という方が適切である。大経の会座は大光明の会座である。いわゆる光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨といわれる会座である。その光明に触れる者はそのままに法を聞くのである。耳で大きくというよりも心で大きくのである。心耳をすませば大光明の声がきこえる。それが大経の会座に列するものの心の感じである。生命から生命へのひびきというか、大生命につつまれる私の生命のひびきというか、正覺大音響流十方（しようがくだいおんこうるじっぽう）という大なるひびきであり、しかもそれは心の奥深いひびきである。

ゲエテのファウストの初には天上の序曲という場面がある。そこには天体の運行、星と星との間に宇宙にひびく大音楽がきこえているかのような一節がある。天体運行の音楽などということは最初に考えたのはギリシアのピタゴラスであったという。此の考えは莊嚴ではあるが、その天体間の音楽を私どもは耳で大きくことが出来ないばかりでなく、心で大きくこともむづかしい。まずそれは空想としか思われない。美しい莊嚴な空想である。

然るに大経における正覺の大音はそんな空想的なものではない。音楽は別に浄土の音楽というものがあつて、それ

る。二千五百年前から今日までの幾億千万の法の友が私の前に遠く列（つらな）つて釈尊の御顔を仰いでいられる。此の会座には温かい空気が流れている。

こんな会座、こんな集まりが他にあるであろうか。お互の心は和らいでいる。たとい世間のことで争つている者でも、此の会座に列すれば和らいでくる。世界の平和の根元の会座である。釈尊のお弟子達をはじめ皆々合掌していられる。合掌は人間の最も強い姿であると或る方からきいたことがある。和らぎの姿である合掌が最も強い姿である。その強さは剛強の強さではなく、柔軟の強さである。世界の平和の光は此の合掌念仏の会座からさしそめると思ふ。

釈尊は大経の会座において三昧（さんまい）におはいらになっていられる。法華経では釈尊が無量義処三昧（むりようぎしよさんまい）に入られて、それから安祥（あんしやう）として三昧から立ち出でたもうということになっていられるが、大経では三昧に入りたもうこともなく、三昧を出でたもうということもない。最初から三昧に入りつぎりの三昧である。大経の御説法は三昧裡の御説法である。その三昧は大寂定（だいじやくじやう）三昧と云われている。非常な静けさである。その大寂定三昧の御説法というのであるからこれも常識ではわからない。併し私は大経の

は別に述べなければならぬ。

大経の会座は見わたす限り大光明に照らされている。大光明というけれども、それは大寂定裡の光明であるから、まばゆいような光明ではない。心に感ずる静寂の光明である。それだから世界の平和の根元となる。仏教は暗いとか陰気であるとか云う人々があるが、それは此の大寂定の光明に触れないからそんなことを云うのである。否触れていながらそれに気がついていないのである。此のような人々を心盲の人々というのである。

併しその心盲の人々にも大光明は必ず徹する。徹せずんば止まずという大光明である。深い心の光明である。大経の世界は内面的に明るい世界である。たとい此の世の中は暗黒であり暴風駛雨（しやう）という有様であっても大経の世界は内面からその暴風駛雨をせずして行くのである。大経の会座というはそのような世界である。

来れ、濁世の起悪造罪（きあくぞうざい）に悩む人々よ、来れ此の大経の会座に。来れという言葉も実にあたらぬ。そのままに目ざめよ。目ざめて大経の会座にある我が身よ。そこには外なる世界の暴風駛雨も内なる我身の起悪造罪も諸仏の御あわれみの下に融けてしまつて行く。諸仏は弥陀諸仏とも云われてある。諸仏を包容したもう弥陀尊の世界であり、そこには弥陀尊と一流れのいのちを示したもう釈尊の会座が開けているのである。



中学生の頃から私は仏教に心ひかれたものである。どこかで仏教講演会などがあると、よく聴聞に出かけたものである。私の祖父が田舎の真宗寺院の住職であり、極めて温厚な人で子供心にも尊敬に値する人物であったことが今だに深く印象づけられている。小学生の頃には夏になるとその祖父のもとで暮したものであるが、その頃にうけた感化が仏教との御縁を深めたものかもしれない。

中学を出て当時校長であった新渡戸稻造先生をしたって上京して、一高に入った。入学当初に私の心をとらえたのは徳風会の掲示であった。近角常観先生を中心とした一高生の仏教の集会であった。毎週一回本郷の求道学舎に集つて、先生から「歎異鈔」、「唯信抄」など数々の講義を聞いたものである。毎日曜日には一般のための日曜講話にも出かけた。今から考えると当時先生から頂いた御教化によって私の人生観なり、また私の医者としての生活態度は、どれほど影響をうけたかわからない。

当時から聞法に心ひかれながらも、人間の生死の問題

次いで起こったのが私の次の弟の死である。彼は純情で頭がすばぬけてよかった。私が一高を出ると同時に一高の独法科に入った。彼も私と同じく徳風会と縁が結ばれて、近角先生の御教化をうけることになった。東大に入ってから求道学舎に入舎して、朝夕先生の勤行に侍り、またいろいろと先生から御世話を頂いたものである。東大卒業間際になって咯血し、療養のために両親の許へ帰つて来た。その後彼の病状は次第に悪化するばかりで、どうしても信仰に入れないというのが彼の病中の悩みであった。病状が末期になって彼はふと手の浮腫（はれ）に気づいた。はじめは肥つて来たのだと誤認して心から喜んだ。

ちょうどその折である。父が手塩にかけていた寒芳蘭の花が開いた。彼はこの美しい花を眺めながら、父が手にかけられてから今日まで幾年になるかときいた。十二年目の今日この花が咲いたのだ。花は独りで咲いたと思つていてもかもしれないが、一輪の花のかげにも長い年月の父の苦勞があったのである。彼は何か心に感じたものの如く「自分もきつと一度は花を咲かせて見せます」といつて意気込んだのであるが、肥えたと思つたのが最後の徴候なのである。立派な頭脳を持ちながらこんなになるのは堪えがたいことであるといつて、父が流すやるせない涙を通して、彼は晴天の霹靂（へきれき）のごとく仏のお慈悲を頂いたの

は、どうしたものか私にとって身近な切実な問題とはならなかった。人の死は結局路傍の問題でしかなかった。しかしその後私の身辺に相次いで起つて来た三人の弟の死によつて私はいいしれないショックを受けた。そして聞法の態度にも方向転換が来たようである。

私が一高に入って間もなく起こったのか、小学六年生の弟の死である。彼は勝気で成績も優秀であった。突然猩紅熱に犯され数日にして咽喉を犯され、水も飲めず言語も発し難いほどにはれ上り一週目には危篤に陥つてしまった。夜半突然床に坐して、マンマンシヤン（仏様）を拜みたいという。父は仏壇に灯を点して弟をいだいた。珠数をくれというので、それを手にかけてやると、苦しい声を出して念仏申すのであった。横になって一時間もたつと、また拜みたいという。珠数をとつて念仏を称え終ると珠数を投げすて、そのまま息が切れた。かねては仏様とは御縁のなかつた彼もたしかに仏様に召されていつた姿を眼前にみせつけられた。

である。彼の口からお念仏がほとばしり出た。「近角先生のお念仏の声色になるが仕方がない」といつて朗々とお念仏が出て来た。信仰に、はいれないことを苦にしていた彼だけにお念仏とともに彼の顔はひかりかがやいた。それまでは牛乳が少し変である、これ位のもので自分は犠牲になりたくないといつて捨て去る彼であったが、それからの彼は百八十度の転回をやつた。一二滴の牛乳がこぼれると、ああもつたいないといつて、なめるようにして頂いた。

危機はいよいよ迫つて来た。薬を頂くにしても「こんな薬で治ろうなどは考えないが、一時間でも薬になったら皆と一緒に喜べる」といつて一包の薬をおし頂くのであった。誰かが泣いているのに気づくと「泣くどころのさわぎではない。こんなうれし、ありがたいことがあるものか」といつてたしなめたものであった。時々強い咳がこみ上げて苦しんで来ると「こんなに苦しまなければならぬ私がいかに喜ばして頂けるのだ。ありがたい」といつて朗々とお念仏がたえない。踊躍歡喜実到手の舞い足の踏むところを知らないほどの法悦を彼の臨終に拝ませて頂いたのである。彼もまたお浄土に召されていつたのである。

一番末の弟は長崎に落された原爆にあつて、二週間重態のまま床についた。いよいよ臨終に近づいて、彼の枕頭で私は仏の慈悲を語りお念仏を申すと、彼もはじめてお念仏



0  
を称えて、にっこりとして大往生の素懷を遂げた。妻と七人の子供を残して。

彼が往生をとげたのは現在療養所が建っている東望山である。私はよくこの小山に登って、太陽の没せんとする西方、海のかなたを眺めるのが好きである。西方浄土という。かなた西のはてにお浄土があるのか、ないのか、私は知るよしもない。だが太陽が静かに沈み行く西のかなたに心ひかれるのである。天にまします我等の神よと呼ばれている天国の空漠たるものにくらべると、西方の浄土という表現は実にあざやかなものである。太陽の沈み行く西のかなた、この地上から万人がこの同一方向に向って手を合せ、互に手をとりあって、辿って行こうとする彼岸、そこにお浄土があると否にかかわらず、お同行の目標だと私は思う。

人の一生を航海にたとえる。山から木材を切り出して、船の建造がはじまる。人間の生がここにはじまるのである。船の装備ができ上って、進水式を終え、いよいよ船出となるのであるが、これが人間の結婚式だと云えよう。新郎が船長として舵をとる。新婦は機関長として席について、処女航海へ船出するのである。この意義ある船出の時にあって、最も重大なことは何であろうか。それはこの船の行先は何処であるか、目的の港は決定しているかという

生航海の船出の最初から僅か一分でも方向がちがっていたら大変なことになる。またとあとまどり不能のことであるからである。この方向を正しくするために、間違いない絶対のコンパスがなくてはならない。私のコンパスはお念仏である。雨も風もあらしもコンパスをたよりに乗り切れるように、幾歳月の喜びも悲しみもお念仏をたよりに乗り越えて行く。

戦場で飛行機が敵弾で損傷をうけると、飛行士は脇目ふらずに一路日本の基地を目ざして飛んで行く。重みとなるものは片端から機外に捨て去り、身軽にして基地へ基地へと飛んで行くのである。決して遊覧飛行ではない人生の飛行も、同様に基地を目ざして飛んで行かねばならない。「あと戻りあと戻りして迎らん甲斐なきことに心ひかれて」漂流しながら、遊覧三昧に忙しいのが人間の姿である。墮獄必定であろう。

航海が遊覧ではない限り、早く彼岸に到達すべきである。彼岸から「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん」と喚（よ）んで頂いているのであるが、雑音に耳掩われて一日でも旅路の長かれとのみ願うている。

遠路はるばる私の外来を訪ねてきた病人がある。診察をすまずと、どの位もてましようかと尋ねる。「あなた一代は大丈夫ですね」と答えると、彼は非常な御満足で、よろ

ことである。

ところが人生航海の船出にあっては、行先の決っていない船が多いのである。目標なしの船出は航海にはならない。それは漂流でしかないのである。右の方が景気がよさそうだと舵を右へとり、左の方に人気があると左へ舵をとりなおす。右往左往している。船路はいつも晴天とはきまらない。風となり、雨となり、時には大暴風雨となるであろう。難破必定である。ここに航海の目標が必要であり、又この目標を定めるには羅針盤がなくてはならない。

人生航海の目標は何処なるか、人生航海のコンパスは何であるか。この二つの問題を船出の日から二人して解いて行かねばならない。ここに人生生活の意義がある。この問題を解明してめでたく彼岸にゴールインすることが出来たら、その人こそ最大勝利者として讃えられるであろう。

船の最後の目標を私は西方の浄土にしている。この久遠の目標を二人して、否、万人が目ざして一路進んで行かねばならない。久遠の一点と結ばれる直線は皆平行にして相互に交錯することはない。久遠の彼岸へと辿り行くお同行の足あとがこうでなければならぬ。お浄土は果して存在するのか、花咲き鳥歌うような安楽境なのか、それは私には全く知る由もない。私にはその存在が問題ではない。私が辿って行く方向が決定しているかどうか問題である。人こんで帰って行った。一時間ばかりすると、またやって来た。停車場まで行ったが急に一代ということが気になり、引き返して来たのである。

人の一代は今日一日と心得ねばならない。「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」でなければならぬ。あるようであてにならないのが明日である。今日一日が人生劇の一幕である。この一幕にはいろんな登場人物があるであろう。病める人物は今日一日をまじめに療養しなければならぬ。看病する人物は病人の為に一日をささげきって看病してあげる。仕事に堪える強壮な人物は今日一日を仕事に打ち込む。静かに幕が下りて皆静かに眠りにつく。今日一日の一幕が最初の幕であり最後の幕であるかも知れない。明日をあてにしないで今日一日の一幕を悔なく踊り抜かなければこの人生劇はお芝居にならない。ただ徒らに幕を繰り返すだけでは意義がない。

ここに五重の塔を建立しようとする。まず今日一日は基礎工事に全力を打ち込む。明日をたのんでいい加減な仕事で今日一日を過ごすならば、他日五重塔が出来上った途端に倒れ落ちるであろう。明日なきものと心得て今日一日に精魂を傾けるならば、一日にして美事な塔の完成が約束されるであろう。浄土も存在しているのではなくて、その人に約束されるものである。



五十六才になる男が私の外来を訪れた。自分の病は不治であることはよく心得ているが、あと幾年の生命ありやと問うのである。それを知って何になるかと反問すると、自分には子供がある。いろいろと準備の都合もあるというのである。的中してよろしきかと問うと、自分の友人二人の寿命はよくあてられたので自分も訪ねて来たのだという。あと幾年位の寿命かと私に返答を迫って来た。私は答えた。あなたの病は不治の状態にある萎縮腎(いしゆくじん)である。しかしあなたの考えは甘い。あと幾年とは何事ぞ。はっきり予後を申すならば、あなたの生命は今日限りである。今日なすべきことに今日一日の精魂をうちこみなさい。明日はあることを期してはならない。明日の計画のみに生きて、今日を無駄に過すものは、明日亡者であり、明日ノイローゼである。

人間の生死は七十年の問題でなくて、今日一日の問題なのである。今日一日を生き抜く人のみが生死を越える人であり、浄土が約束される人である。四十余年医者として沢山の人の臨終に出合った。鮮かに生死を越えゆく人のあまりに少ない。しかし、これは人ごとではない。自分の足どりのおぼつかなさを感じる。

本願の船には乗れど煩惱の

船のともつなはなしかねつも

## 一道会の記

(三)

さて、松本解雄先生のお話の要は次の通りであります。

本日は先生の三十三回忌に参詣し、毎年参って何がしかの話をさせて頂いているのですが、最近の感想を極く簡単に申し上げたいと思います。歎異鈔は前半聖人実語の第十章迄と、後半第十一章から十八章迄、当時の念仏に対する間違った解釈、総序に唯円房が「後学相統の疑惑あることを思うに」と云ってあるように、真実の信心に異るところを歎いて、それを正して正信にかえすための文とに分れているのであります。で私は第十章の「念仏には無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議の故に」と、池山先生の話されたことと思ひ出して私の味わいを述べたいと思います。

歎異鈔第一章は総括的に聖人の念仏の信心についての仰せであり、第十章は前九章を聖人がまとめたの御言葉であります。これは赤松俊秀氏が「大法輪」十一月号に、講演

船に帆(ほ)をあぐれば、岸のはしるに似たれども、これ船のはしるなり。信心はわがこころえよりおこるに似たれども、如来の仏智より、おこさしめたもう。

月をながめ、はなをもてあそぶことは、これひとえに月あざやかに照らし、花のうつくしく開けるゆえに、こなたのこころに、月花にめでられるなり。仏恩のよろこばれて御慈悲の尊まるるは、如来のかたより、もよおしたもう念仏にいさめられてのことぞかし。

ふかきところは舟橋にてわたり、高きところは梯(はしご)にてのぼる。報身報土(ほうしんほうど)のさとりは、深くして底をしらず、たかくしていただきを知らぬことなれども、誓願不思議の舟橋、名号不思議の梯にて必ずわたり、のぼるべきなり。



### 榊原徳草

の筆記ですが、義なきを義とす、について出ていました。それを見て今迄にこの無義為義を何の気なしに読み過ごしていたがそうではないと気づいたので。又これは池山先生の御言葉とも関係してくるのでないかと思ったのです。

「無義為義」のことは末灯鈔に、法然上人から聖人が御聞かせにあずかったことで「……………また他力と申すことは、弥陀如来の御誓のなかに選択撰取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり、如来の御誓なれば「他力には義なきを義とす」と聖人は仰言(おおせごと)にてありき。義ということは計らうことばなり。行者の計らひは自力なれば義というなり。他力は本願を信樂して往生必定なる故に更に義なしとなり」。この御手紙は証信房宛の親鸞聖人の御手紙で聖人八十三才のものであります。その他にも聖人の無義為義の語は沢山出ています。正像末和讃にも「聖道門の人はみな自力の心をむねとして他力不思議にいりぬれば、義なきを義とすと信知せり」と



あります。赤松氏は、他力は義なきを義とすに就いて当時関東の道場で念仏の話し合いをしているが六ツ箇敷いことを言っている。有念無念、一念と他念、

善知識のみ等の教義上の論議のみを言っている、それらに対して、聖人は京都から「義なきを義とす」とお答えになつて居ると赤松氏は言つて居られる。理由はその通りと思うが、聖人は法然上人の仰せをそのまま繰り返しておられる。聖人は常に法然上人の仰せを繰り返して仰言つておいでになると思うのです。

私は、池山先生の場合、殆ど御講演のたびに第二章の「ただ念仏して」、どこでも繰り返して居られる。法然上人から聖人は「無義為義」を、池山先生は「ただ念仏して」をくり返し仰言つておられる。

私等二十才か二十一、三才頃、恐らく池山先生の所で無理屈を話したと思う。それを先生は聞いてどうしろとは仰言らない、それを直接踏まえては仰言らないが「ああそうですか、南無阿弥陀仏」とお答えになつておられる。その時はそれが私等には解らなかつたんです。聖人が関東の同行達に「念仏は義なきを義とす」と、先生は私等に「ただ念仏して」と。

今思いますことは、聖人が関東の同行達に「無義をもて義とす」と仰言つたそれは、その御言葉、その仰せは、池

あり、高等な働きは大脳皮質が司（つかさど）るが、ここに古い皮質と新しい皮質があつて、古い大脳皮質は動物性に近い働き、情欲等を働く、新しい方は叡智、智慧を司る。だから同じ人間の中にも色々ある。

わがうちにしろもの顔うごめける。

不思議な吾を写せる鏡

まずい腰折ですが、古と新との競合、交絡、闘争によつて川畑の中にも色々の顔が出てくる、一つことを解決するにも色々の顔がやつて居る。

池山先生は純粹性の人格といったが、これは生れつきのものでもあるが、然し又漸々と日夜反省し批判し、仏との語（かた）らいにより、仏智に照らされて出来たものと思う。先生は自分を中心にした色のついていない所が特色だと思ふ。その反面冷たい面があるが、私のも一人の先生横田和上と違つた所であるが、これ又私達を浄め引きつけたと思ふ。

ヘルマン、ヘッセの詩に、「神が人に絶望を与えるのは、その人を殺すためではなく、新しい生命を甦らすためである」とあるが、新しい生命を甦らすためには、人に絶望を与えないと、最も高い我れが出て来ない。にっちもさつちも出来ぬ時に芽をふいてくると私は思う。吾々が地位、名譽そのみだと最も低い我れで済んでしまう。先生

山先生においては「ただ念仏して」に置き換えてよいのではないかと思ふのであります。

次に川畑愛義先生のお話は次のようです。——川畑先生は先ず始めに此所へ来る道がややこしくて分らんと仰言るこれは毎年のことで、或る年など電話で聞いてくる、それでそのことが原因で案内状に地図を入れ精しく道すじを示すようにしたのだが、今日もまたわからんと云われ御話が始まる。法兄の人格の面白い一面である。何か微笑（ほはえ）ましく深い感銘を私は受けるのであります。さて先生の御話です。

実は今日、家に或る会社の社長さんが来られたので無理にこの会へお連れして来ました。一道会とはどんな会であるか？池山先生とは？と聞かれるが、こう聞き直られると何と答えてよいか迷うのです。まあ先生を抽象すると、人間性に於ける純粹性が抽象された、比較的純粹性の人格、とても云われる方でありませう。勝手な自分の主観を難えないお方で、自分の考えを他に押しつけぬ、もっと云うと誤魔化しがない透明な方、その意味で冷たい方でありました同じ人間の中でも色々多様でさまざま多面性があると思ふ。最近の生理学からいうと、人間の魂の宿る所は大脳で

に接して高い我れを引出して頂いた。

先生は純粹性の人で、従つて自然に親しまれた。我欲からのがれ自然を愛された。ここに又或る人生を教えて下さつた。或る晩、私達夫婦は蓮華谷の虫の声を聞きに來いとお誘いを受けたことがあつた。

松本先生が先程云われたように先生はガサガサしたところのない方である。先生と二人きりで黙つて差向かいでいる時が深い感銘をうけたと思ふ。

先生が本心に「ナンマンダブ」と云われると、仏々相念と云うか、静かな念仏、大地にねざした念仏を感ずるのであつた。

話は変わるが、十七才で両手を切られた芸妓の妻吉、あの大石順教尼が八十才で亡くなつたが、順教尼に「三無の恩」というのがある。一無、学問がない、小学校にも行けなかつたから無学である、だから誰にも頭が下げられる。二無、手が無いから字が書けない、だからカナリヤに口で字を書くことを教えられた。三無、無銭である、だから物に頼らないで心によつて生きる。これが順教尼の三無の教である。

池山先生には物がなく、我れがなく、凡てが無い、そこから私共に透明な放射能みたいなものを下すつた。

何かに頼っている間は、高い自分は発見されない、高い



大脳皮質を出さないで低い皮質だけですんでしまふ。これは絶望でしかない。

わがうちにもろもろの顔うごめける。

不思議な吾を写せる鏡

これを教えて下さったのは池山先生であり、誠に有難い御縁を結んで頂いたものとつくづく身の幸せを謝すばかりであります。

次に長谷顕性先生のお話は次のようでありました。そのとつとつとした御言葉のうちに、自分をおろそかにせず、常に仏に面して光りに聴く姿が同座する吾々皆の心に犇々と響いてくることでありました。法兄は私が曾ての日、四十年前に、初めてお念仏に遭うことが出来たあの顕道會館の坐談を受けたときに、真向いに宮地先生、右側にこの長谷先生が居られて、宮地先生が大悲のお念仏のありつたけを熱烈に説いて下さる側で、ずっと附き添っておられ、そうして静かな深いお念仏を称えて私を祈念して下さった。その連続念仏の音が「……………ツマンダ、ツマンダ」というように聞こえて来たことを今でも忘れることができせん。私には深い御縁の善知識の一人であります。

私は長谷と申しまして、お話をしようと思っていなかったので、準備もしておりません。私六十四才であります

ということをも身をもって教えて下さったのであります。先程申しました通り、小さい時から弱かったので、仏の教を聞く御縁は深かったが、歎異鈔の終りの方の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とありますが、「ただ念仏のみぞまこと」のこの言葉が本当に分かるようにならねばならぬと、教えられました。「煩惱具足の凡夫云々、ただ念仏のみぞまこと」これがわかったようで、わからぬ。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもてそらごとたわごと」とこれだけは、押さえてみると、そうだなあ、と思う。「煩惱具足」そうだ、「火宅無常」そうだ、と感ぜられる。思える。「よろずのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに」、ここまでではそう思えるが「ただ念仏のみぞまこと」、どうしてこう言えるのか？

そのようなうちに、私は、京都にあって、花田、松本、川畑の諸先生方が念仏を喜んでおられる、それに触れて、初めて、「念仏のみぞまこと」を知らせて頂いたのであります。「ただ念仏のみぞまこと」これは自分では思えない。仏の方(かた)から、仏の心を頂いて、「まこと」を知った善知識の言葉によってほんとに念仏のみぞまことが知れるのであります。

が、また二十代の京都の学生時代に、この池山先生の御縁に会わせて頂いた者でありまして、先生がお亡くなりになりました時は、故郷の富山の方に帰っておりましたので……………どうも生れながら身体が弱く小さい時から人々に云われぬ苦しみを嘗めていて、京都へ来て先生の尊い有難い御縁を頂いて、富山へ帰って、色々仕事をしておりました。身体が悪かったが、然し、先生から聞かせて頂いた「ただ念仏して」のこれを力に日々を送って居ましたが、戦争となり、月日が経つてもう六十四才になりました。四十年近くなり、吃驚していることです。富山に帰ってから、身体が悪く、向うで先生を思うことでした。それから榎原様から毎年二道会の御案内を頂いていたが、段々延ばして、二十回も頂いたが未だ一度も参詣しない。今日始めて、二十年振りで参りました。恐らく、私は、この次はどうなる？今日は初めの終りと思うことであります。身の上話を申上げて申訳ありません。先程の松本先生、川畑先生、皆私の先輩であります。また花田先生、これまた先生のお陰で御念仏する身に、その裏に池山先生がおられることとあります。

池山先生はいつもお教えの中に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、好き人の仰せこうむりて信するほかに別の子細なきなり」、これだけだ

池山先生が「親鸞におきては、ただ念仏して」といつの御話の時も仰言った。

爾来四十年間、人生の色々のことに打当たって、時には念仏さえも本当かと、疑ったこともありましたが、「念仏のみぞまこと」を教えて下さった先生の御言葉は、仏の言葉として響いてまいるのであります。

尊い御縁に遭わせて頂いて、深く御礼申し上げます。

### 常倫を超越したまう大悲

南無阿弥陀仏は 大地の如し

大地がよろずのものを養いそだてるように、如来は一切の衆生を攝取してはぐくみたもう

南無阿弥陀仏は 大海の如し

大海が清き流れも、濁れる流れも平等に、衆流をいれるように、如来は善人と悪人、智者と愚者との区別なく平等に大慈のみむねにおさめ取りたもう

南無阿弥陀仏は 日月の如し

日月は四天下を何らのへだてなく照らす。如来は、一切衆生の心の闇を何らのへだてもなく照破したもう

「信念の叫び」より



一、生きたお慈悲

信仰は単に聞いた覚えたではない。話は死んでいる。話を通して生きた如来さまの御心をわが心のうちに味わうのである。

話を聞いて知って覚えているにすぎないのならば、それは死んだ信仰である。信仰は生きておる。話によって、生きたお慈悲を心のうちにいただくのである。それが信仰です。信仰は理屈でも学問でもなんでもない。生きた事実です。

二、信仰入門の道程

(一) 多くの人は大底が、いつか亡びなければならぬのだにはかないこの世のものをたのみしている。他人―親とか兄弟とか親友とか―というような人をたのみにしたりまた財産とか名誉とか、地位とか学問というようなものを力としてたよっている。

けれども、結局はそれらのものは皆、必ず間に合わぬことがあり、力とならぬものである。それで何かの因縁で、

るうちには、薬師如来にも、大目如来にも救われぬ、弁天さんでも駄目である。大黒さんでも間に合わぬ。稲荷さんでもこの世だけなら気やすめにもなろうが死の問題になつては駄目である。と段々に気づくのである。

(五) こうなつてみれば、我らの真の救い主は、ただ一仏、生も死も共にこのままお救い下さる御親、大慈大悲の阿弥陀如来さまであつたかということに、はじめて永い迷いの夢からめざませていただくことが出来る。ここにはじめて大安慰に住することが出来るのである。

三、わたくしの二ころ

私の部屋にフト何物かバツタと落ちて来た。みれば蛇である。びっくりした、私は戸外に追いやるうとしたが蛇はますます奥へ入つて来て、とうとう罅(しきい)の間にはいった。

私はつくづくとその時感じました。世に動物は多い。そのうちでも蛇はさらに醜いものである。しかるに何ぞはからん、私の心は蛇よりも見苦しい心ではないか。蛇は蛙や鼠を飲むけれども、この増丸の心は蛙や鼠ぐらいなものではない、種々様々なものを飲んでゐる。それを吐きだしたから見られたものではない、と色々感じさせられた。これ全く蛇が私に教えてくれた大教訓であつたのである。

たとえば妻に別れたり、事業に失敗したりなど、少しでも自分というもの、世の中というものを考えるようになる。始めて、この世は実に浮世である、何事も当にならぬ世の中である、一切はだめだということが解かつて来るのである。

(二) そこで、たのむべきものは外にはない、ただ自分だけである。自分だけだと考える。けれども、それもよく考えて見れば、自分そのものすら実に当にならぬものである。頼みにならぬものである、と気がつくようになって来るのである。

(三) この世は浮世である。一切は頼みにならぬ。自分自身までも頼みにならぬものであるとなつて見れば、ここに、しからば真に頼みになり力になるものはないか。未来の末かけてたよりになるものはないかということになつて救い主をたずねるようになる。

(四) そこで人間以上の諸神諸仏諸菩薩などによつて救われようとする。けれども、段々その教の道を修行してい

四、寸言抄

暗夜の螢の火は、私どもをして仏のお慈悲の光をしのばしめ、暁の蛙の声は、私をして高く如来の御名を称えさす。嗚呼、宇宙はかくしてそのまま如来の御声であり仏のお光である。

○ 孝子の心中に孝行なく、ただ親あるのみ。

○ 忠臣の心中に忠義なく、ただ主あるのみ。

○ 信者の心中に信心なく、ただ仏あるのみ。

○ 心は春の如くうかれ、夏のごとく恩愛の情にこがれ、また秋のごとく淋しく、また冬のごとく冷えきつて冷性氷のごとし。

○ 人間の世界は全く思うようにゆかないので殆んどこまるしかしよく考えて見れば、たのもしき世なるかな。到る処お慈悲は満ち／＼ていらせられる。全く如来の御慈悲と共に日暮しさせていただくとは、有難き限りよ。南無阿弥陀仏。

○ 自己のはからいをうち捨て、仏に一切をまかせ奉つて、それから後に如来のお慈悲をうけて信仰をうるのではない



如来のお慈悲が私どもをして、一切だめであるということ  
を知らせてくださるのである。そして私のはからいをして  
させて、私共に信仰を与えて下さるのである。

○ 渋柿はいつまでたっても渋い、けれども日輪さまのお光  
明に照らされて、ついには渋のまんまが甘い／＼甘柿にな  
る。私共は渋柿であり、如来は日輪様のようなものであ  
る。私共の愚痴、瞋恚、嫉妬、貪欲の煩惱の渋はいつまで  
たっても止む時はない。その三毒の煩惱のありだけが、鬼  
と大蛇の心のありだけが、如来のお慈悲の光明に照らされ  
て、ついには渋のまんま、煩惱罪濁のまんま、煩惱即菩提  
となつて、お浄土へ参らせていただく。鬼のまま大蛇のま  
まに尊い仏の甘柿に生れかわるのである。渋をとって甘柿  
になるのではない、渋のままである。煩惱をのけてではな  
い、煩惱のまま菩提の智慧とさせて貰うのである。……  
私共はただ本願のお不思議をかたじけなくおうけするば  
かりである。あのきれいな蓮の花は、清らかな水に宿らず  
して、汚いどぶの濁りの中に宿る、しかもどぶの濁りにそ  
まずして清浄な花が咲く、これが不思議である。……

○ 泥の中 誰のしわざか 蓮の花

### 五、寸 鉄 集

母の肉、死して、母の霊、いよいよ我が肉に生く。

死は一旦なり、信は永遠なり。  
念仏の外に生命なし。

○ 二人の幼い御子息を枕頭に召されて

カラスはカーカー スズメはチュウチュウ

親がスズメなら 子もスズメ

子ガラスがカーカー云えば親ガラスがすぐとんでくる

子スズメがチュウチュウ云えば親スズメがすぐとんでくる。

私共がナムアマミダブツ／＼と云えば、大悲の親様がすぐとんできて、おれはここにおるぞ／＼と仰言つて下さるのだ。

○ 安養浄土に帰るからお念仏で見送っておくれ。

○ 最後にお口をすずがれて……

八幡市、八幡宮。御師匠東陽和上、前田和上、父母の御  
真影に向い、永々お世話になりました、と。

恋いしくば、南無阿弥陀仏を称うべし我も六字のうちに  
こそすめ、 合 掌。

○ 私は今まで落ちまい／＼とあせっていた。  
然るに今や、その落ちる心のありだけが御仏の慈悲力に  
よって仏にして下さると聞かせて貰って見れば、ただ／＼  
有難い外なし。

○ 雷に、大あくびする つんぽかな

○ 我らが観るべき事実二つあり。一は自己の罪惡、二は  
如来の大悲なり。

○ この二個の事実、信念の領域は、互に接触してはなれず  
かの大悲はこの罪惡に加わり、この罪惡はかの大悲にたよ  
る。自らおののく程の罪を抱きながら、安らかに大悲のふ  
ところにいこうもの、これ信仰生活のありさまなり。

○ 道に古今なし、人に迷悟あり

○ 生のみ人間の有にあらざ、死も亦有す

### 六、臨 終 法 語

真田増丸は四方八方に対して実に濟まなかつた。唯々濟  
まぬ／＼より外に何にも懺悔の言葉を知らぬ。

肉体を持つ者は親鸞聖人の信仰の外には救われまい。

### △ 後 記 △

先生は大正十五年に亡くなれましたか、私は大正十二  
年の夏、広山県の鞆町の明円寺に、生れてはじめてお参り  
した時、先生のお話をおききし、その後書物で導きをうけ  
ました。

初対面の日、先生が白扇に「泥の中、誰のしわざかはす  
の花」と書いて下さつて、この味がわかるまで聞きなされ  
と云われたことが心に刻まれております。

又平素御病氣勝で、五十歳で亡くなれましたか、「今  
日も人の死ぬ目にて候」という一句を常に引用されて、  
「真にたのむべきものは他なし、南無阿弥陀仏の名考であ  
る。」と仰言っていました。

○ 私が大卒を卒えた時、池山先生か、「君も街頭に立つて  
真田さんのようにやつては」と云われたことかあります  
が、九州の佐世保で宮地さんと一緒に街頭で真田師のよう  
に話をしたことかありました。その時、佐世保  
の信者の方か、「はじめ真田師が来講せられた時、誰も耳  
を借さなかつた。すると師は電柱に向つて念仏せられて、  
電柱に念仏を吹きこんでおくと云われた」由であります、  
師のところが師亡きあとにも同信の人々の心に深く刻まれ  
ていることをありがたくお聞きしました。

(花田記)





あ  
と  
が  
ま  
き

きびしい寒さも彼岸に入りまして春來たるの喜びを覚えます。やがて四月、入学、就職と若人の嬉々とした顔が街にあふれています。

野に山に花も開き、街々、村々に、花祭りの催しがはじまり、仏陀の誕生をたたえる歌声も、きびしい世相にやわらぎの光をもたらすことでしょう。

それにつけても、如来の慈光を身にうけて、心の春を迎え、信心の花をこの泥沼の煩惱の中に開かせて頂けますことは、永遠の春光に浴するよろこびであります。

先日も還曆を迎えた友が来て「昔は赤いジパンを着たものですが、その年になりました」と感慨深く語りましたので、「一寸お待ち、会社では五十五年、学校でも六十すぎると退官となるが、親鸞聖人は六十の頃は関東いき揚げの準備中、六十三頃入浴、七十五まで教行信証の完成に専念せられ、それから沢山の著書を八十八まで書き続けられたので、聖人は、六十から、いよいよこれからだ!と思われたと思う。四十

五十は鼻たれ小僧と世間にも云うが、信の旅ではこれから妙味がわかりはじめのでしょう」と答え、老いを知られぬ聖人の歩みに無限の力づけと慰安をうけました。

福島先生のお原稿で、「二千五百年もすぎたが、自分は大経の会座のどこかに居るが、私は私一人に向って下さるのを覚える」とありました。池山先生の教えをうけた人々が皆々、自分が一番先生に思われていると打ちあけ合って呆然としたことを思い合せ、又近角先生の求道会館に老人も学生も、学者も実業家も、職人も軍人も、貧者も富者も、色々の人々が御講話に聞き入っていられたことも思い併せました。こうした事実をおしめて、仏陀が老少善悪の人をえらび給わず、平等にして一子の如く憐愍せられる真実も知らされました。西方浄土は高原先生の「水の味」から、真田先生の法味は「信念の叫び」を街の古本屋で偶然見出し、そこから抄出させて頂きました。

### おことわり

五月二日と六月六日の第一日曜は、津市大谷町彰見寺の徳本会に招かれましたので一道会例会を休講にいたします。(花田)

### 御案内

○五月六月は第二、三日曜、午後一時半。一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車。東へ三筋目、左入ル、二軒目。

○毎月二十四日、午前午後、昭和区小桜町。教西寺法話会。市電、御器所通り下車。市バス、北山通り下車、東入ル。

定価 半年 二百五十円(送共)  
一年 五百円(送共)

名古屋市南区坂上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区坂上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番  
郵便番号 四五七